

はじめに

村上春樹さんの書く小説の読者は男女を問わず、中学生から後期高齢者まで、年齢も多岐にわたります。そして日本だけにとどまらず、世界50カ国語以上に翻訳され、世界中の読者を獲得しています。ここまで読者の広がりをもつ日本人の作家はまれなことでしょう。なかでも、国外では英語版の読者が圧倒的に多く、それ以外の言語への翻訳も英語版をもとにしたものが多いと思われる。村上さんの小説の英語版はその点でもとても大きな存在です。

本書を手にとられたかたの動機はさまざまでしょう。村上春樹さんの書く小説が世界の読者を引きつけるのはなぜか。何がそれほど魅力的なのか、それを知りたくて、英語で読んで探してみたいと思ったかたもいるかもしれません。もともと村上春樹のファンで英語も好きな読者が、小説の日本語は英語でどう表現されているのだろうと興味をもったケースもあるかもしれません。すでに日本語で読みストーリーはわかるので、英語で読めるかどうか、英語リーディングの素材としてトライしてみたいと思ったかたもいるかもしれません。

本書は、このようなかたがたが英語で読むことによって、村上さんの小説の魅力を再認識し、あらたな発見ができるように、英語で読む楽しさを読者のみなさんに伝え、共有したい、という意図のものに編集されました。

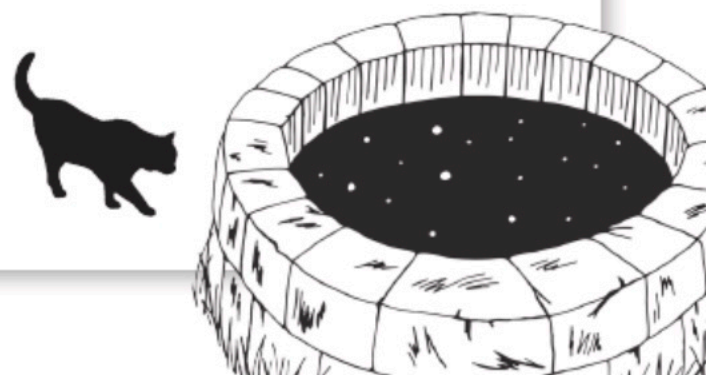
本書では10本の長編小説を取り上げています。なぜ短編ではなく、長編小説か。それは村上さんは基本的に長編小説作家だと思うからです。村上春樹さんの愛読者なら何度も長編小説を読んでいるだろう、それならばだいたいの雰囲気とストーリーは頭に入っているのではないかと、好きな小説ならば意外に英語でも読みやすいかもしれない、日本語と英語を見比べながら読んでもいいのではないかと、読み方は何でもあり！ という発想です。

本書の企画は、2019年8月、「村上春樹って英語で読むとわかりやすいんだ。日本語で読むよりもわかりやすかったよ。村上春樹を英語で読む本を作ってみない？」という株式会社アルクの創業者であり最高顧問、コスモピア株式会社の相談役でもある平本照磨氏の呼びかけからスタートしました。その呼びかけに応じたハルキスト編集者4名、途中からもう1名加わって、コスモピア編集部の有志の面々と「村上春樹を英語で読む会」をスタートさせました。さまざまな勤務先から、仕事を終えたあとに弊社に集まり、意見を出し合いました。その後、コロナで自粛の最中にはzoomミーティングで意見を交換。楽しいひとときを過ごすことができました。

本書の刊行をご快諾くださった村上春樹さん、最後までお付き合いくださった村上事務所のスタッフの方々、そして転載をご許可いただいた株式会社講談社、株式会社新潮社、株式会社文藝春秋に、心より感謝いたします。

村上さんの小説の英語版を通して、人種や国を超えて人間として共感し共有するものをしっかりと感じ、楽しんでください。

2020年10月吉日
村上春樹を英語で読む会



- ・はじめに …… 2
- ・本書の構成 …… 8
- ・「ムラカミ」のアメリカ進出と読まれ方 八巻由利子 …… 12

風の歌を聴け

— *Hear the Wind Sing* …… 23

- シーン1 完璧な文章などといったものは存在しない …… 26
- シーン2 僕が鼠と初めて出会ったのは3年前の春のことだった …… 30
- シーン3 僕が寝た三番目の女の子について話す …… 34
- シーン4 それは火星の地表に無数に掘られた …… 38
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 42
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 46

1973年のピンボール

— *Pinball, 1973* …… 55

- シーン1 直子も何度かそういった話をしてくれた …… 58
- シーン2 男はそこまで言って息を呑んだ …… 62
- シーン3 二人は長いあいだ黙っていた …… 66
- シーン4 ある日、何かが僕たちの心を捉える …… 70
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 74
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 78

羊をめぐる冒険

— *A Wild Sheep Chase* …… 85

- シーン1 僕がはじめて彼女に会ったのは …… 88
- シーン2 君の耳のことをもう少し聞きたいな …… 92
- シーン3 元気かい? …… 96
- シーン4 時計が二時の鐘を打ち終えた直後に …… 100
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 104
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 108

(ダンス・ダンス・ダンス — *Dance Dance Dance* …… 114)

世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド — *Hard-Boiled Wonderland and the End of the World* …… 121

- シーン1 ポケットの中の小銭に神経を集中させていた …… 124
- シーン2 あんたには落ちつき次第まず図書館に …… 128
- シーン3 そう、我々は影をひきずって歩いていた …… 132
- シーン4 私のシャフリングのパスワードは〈世界の終り〉である …… 136
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 140
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 144

ノルウェイの森

— *Norwegian Wood* …… 159

- シーン1 僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた …… 162
- シーン2 でもそれじゃ危くってしょうがないだろう …… 166
- シーン3 悪いけどさ、ラジオ体操は屋上かなんかで …… 170
- シーン4 あまり愛されなかったと思うの? …… 174
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 178
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 182

ねじまき鳥クロニクル

— *The Wind-Up Bird Chronicle* …… 191

- シーン1 台所でスパゲティをゆでているときに …… 194
- シーン2 「ねじまき鳥さん」と誰かが庭の方から叫んだ …… 198
- シーン3 井戸の底から明け方の星を見上げるのは …… 200
- シーン4 女は前と同じようにいかにも上等そうな服を …… 204
- 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 208
- この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 212

海辺のカフカ

— *Kafka on the Shore* …… 227

- シーン1 カラスと呼ばれる少年はひとつため息をつき …… 230
 シーン2 「ジョニー・ウォーカーさん」とナカタさんは …… 234
 シーン3 空からイワシが降ってきた！ …… 238
 シーン4 〈幽霊〉という呼び方が正しいのかどうか …… 242
 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 246
 この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 250

1Q84

— *1Q84* …… 265

- シーン1 青豆はショルダーバッグから …… 268
 シーン2 重い沈黙があった …… 272
 シーン3 考えてみれば、こんな風に月をしげしげと
 眺めるのは …… 276
 シーン4 それから青豆は銃把を上にして …… 278
 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 282
 この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 286

色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年
— *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage* …… 297

- シーン1 大学二年生の七月から、翌年の一月にかけて …… 300
 シーン2 悪いけど、もうこれ以上誰のところにも …… 304
 シーン3 緑川はゆっくりあたりを見回し …… 308
 シーン4 つくるは例によって一杯だけワインを飲み …… 312
 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 316
 この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 320

騎士団長殺し

— *Killing Commendatore* …… 329

- シーン1 今日、短い午睡から目覚めたとき …… 332
 シーン2 それが包装された絵画であることは …… 336
 シーン3 もしできることなら私としては …… 340
 シーン4 あなたは霊のようなものなのですか？ …… 344
 英語で読むためのお助けミニ英和表現集 …… 348
 この日本語、英語ではそう言うミニ和英表現集 …… 352

・年表 …… 360

・参考資料 …… 363

コラム 村上春樹を英語で読む

村上春樹の小説を英語で読む楽しさ 谷川敬子 ……	20
村上春樹を英語で読む 井土康仁 ……	51
村上春樹と井戸 — 地下二階と集合的 無意識 高橋清貴 ……	52
村上作品の小説の小道具 谷川敬子 ……	118

英語で読む「世界の終りとハードボイル ド・ワンダーランド」 依 晶子 ……	152
「やれやれ」をめぐる コスモピア編集部 ……	155
図書館と風の音 生越秀子 ……	156
村上春樹さんのジャズを巡る時間旅行 青野浩史 ……	188

【特別記事】「ねじまき鳥クロニクル」の 英訳から学ぶこと 平林美都子 ……	222
村上春樹にとってポップスとは何か 八巻由利子 ……	258
器としての肉体 コスモピア編集部 ……	261
小説に描かれた「さりげない日常」 谷川敬子 ……	262

英語で楽しむ「1Q84」と「騎士団長殺し」 平本照磨 ……	294
長編作品を英語で聞こう！ 西澤 — ……	328

本書の構成

本書は大きく、①「10の長編小説の概要の紹介、抜粋したシーンの紹介、表現の紹介」と、②「村上作品全体もしくは各作品にまつわるコラム」のふたつの部分に分かれています。ここでは、①10の長編小説のパートの構成を紹介します。

1 作品の概要

作品情報、登場人物、取り上げた4つのシーン、出典について説明するページです。

作品の背景やあらすじなどに関する全般的かつ簡単な情報を記します。

抜粋したシーンの説明です。どういうシーンを抜粋したのかを、そのシーンの英語も含めて簡単に解説しています。

<p>作品情報</p> <p>日本語版の題名は『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』だが、英語版のタイトルでは <i>Hard-Boiled Wonderland and the End of the World</i> と訳出している。また、題名に「ハードボイルド・ワンダーランド」と「世界の終わりと」の両方が入っているが、日本語版では「ハードボイルド・ワンダーランド」のみを「[1]」と訳出している。本書の題名は「[1]」で訳出されることになっている。訳出では「世界の終わりと」は「ハードボイルド・ワンダーランド」に置き換えて、「世界の終わりと」は「世界の終わりと」に置き換えている。訳出では「世界の終わりと」は「世界の終わりと」に置き換えている。訳出では「世界の終わりと」は「世界の終わりと」に置き換えている。</p> <p>登場人物について簡単に記します。名前は日本語と英語で記しています。</p>	<p>取り上げた4つのシーンについて</p> <p>シーン1 ガケットの小顔に神経を集中させていた</p> <p>シーン2 本人には落ちる音も気づかず階段に</p> <p>シーン3 そう、彼が顔を覗き込んでいた</p> <p>シーン4 私のシャブリングのパスワードは彼の手紙のやりとり</p> <p>英語のシーンを抜粋した底本を示しています。</p> <p>日本語のシーンを抜粋した底本を示しています。</p>
---	--

登場人物について簡単に記します。名前は日本語と英語で記しています。

英語のシーンを抜粋した底本を示しています。

日本語のシーンを抜粋した底本を示しています。

2 抜粋した4つのシーン

ひとつの作品について、4箇所ずつ抜粋シーンを示します。最初は冒頭シーンや序章の途中から選ばれています。右ページが作品の原文、左ページがその部分の英訳です。英文と日本語原作の関係は、英文解釈、和英作文ではないので、厳密には一字一句ごとに対応はしていませんが、このシーンで表現したいことの粋が反映されているものとして捉えてください。

抜粋した最初の部分の日本語です。

前後の文脈を簡単に示します。

<p>シーン1 ガケットの小顔に神経を集中させていた</p> <p>I was concentrating so hard on the critical instant that I didn't even notice. Or more precisely, my eyes had seen the opening doors, but I didn't fully grasp the significance of the event. Of course, the doors' opening meant the linking of two spaces previously denied accessible constantly by means of those very doors. And at the same time, it meant the elevator had reached its destination.</p> <p>I turned my attention to what lay beyond the doors. There was a corridor and in the corridor stood a woman. A young woman, dressed in a pink suit, wearing pink high heels. The suit was of a polished material, her face equally polished. The woman considered my presence, then nodded succinctly. "Come this way," she seemed to indicate. I gave up all hope of that instant, and removing my hands from my pockets, I exited the elevator. Whereupon the elevator doors closed behind me as if they'd been waiting for me to leave.</p> <p>Standing there in the corridor, I took a good look around, but I encountered no hint of the nature of my current circumstances. It did seem to be an interior passage of a building, but my school kid could have told you as much.</p> <p>The interior was gloomy, featureless. Like the elevator. Quality materials throughout; no sign of wear. Marble floors buffed to a high luster; the walls a coated off-white, like the moulton I eat for breakfast. Along either side of the corridor were tall wooden doors, each affixed with metal room numbers, but out of order. <93> was next to <1213> next to <26>. Something was wrong. Nobody numbers rooms like that.</p> <p>The young woman hardly spoke. "This way, please," was my only cue. I followed her. She was slender, her hair pulled back. She had a certain air of mystery about her. She was looking at me as if she were waiting for me to speak. I didn't.</p>	<p>シーン1 ガケットの小顔に神経を集中させていた</p> <p>ガケットの小顔に神経を集中させていたせいで、はじめての瞬間に気づいたことを私はうまく記憶することができなかった。というよりも少し正確に記憶すると、ドアが開いたのはほんの数秒の間で、それが開いた瞬間に何を意識するのかがぼんやりとしか思い出せなかった、ということになる。もちろんドアが開くというの、それまでの瞬間に通過する空間が狭く感じられていたものの、それが開いた瞬間にそれが開いた瞬間にそれは私の期待したエレベーターが到着したことを意味している。</p> <p>私はエレベーターの中を降りた瞬間に目の前に廊下があった。廊下の奥には廊下があり、廊下には女性が出ていた。ピンクの服を着た若い女性で、ピンクのハイヒールを履いていた。その服は光沢のある素材で、彼女の顔も同様に磨きあげられていた。女性は私の顔を覗き込んで、うなづいてくれた。そして、その瞬間に私はエレベーターから降りた瞬間にエレベーターの扉が閉じた。まるで私がそこに居たかのように感じた。</p> <p>廊下で立ちどまり、廊下をしっかりと見回したが、私の置かれた状況について何かを察知することができなかった。それは明らかに建物の内部の通路であるように感じた。しかし、私の学校時代の友人が教えてくれたように、それは明らかに建物の内部の通路であるように感じた。</p> <p>その廊下は暗く、特徴がなかった。エレベーターと同じように、質の高い材料が使われていた。大理石の床は磨きあげられていた。壁はオフホワイトの塗料で塗られていた。朝食に食べるようなモルトンという材料が、廊下の両側に高く並んでおり、それぞれに木製の扉が取り付けられていた。扉の番号は順番通りに付いていなかった。93の番号が1213の番号の隣に、26の番号が93の番号の隣に付いていた。誰かが部屋の番号を順番通りに付けないでいる。誰かが部屋の番号を順番通りに付けないでいる。</p> <p>若い女性がほとんど話さなかった。"こちらへ、お願いします。"が私の唯一のヒントだった。私は彼女に続いた。彼女は細く、髪は後ろで束ねられていた。彼女には何やら神秘的な雰囲気があった。</p>
---	--

英語の抜粋です。出典は、「[1]作品の概要」の右ページ下に示しているものです。

英語の語注です。「」で示されたものは日本語原文に対応しています。

日本語の抜粋です。英語の文との対照を容易にするために、パラグラフで英語の部分と行を合わせているものがあり、パラグラフ間のスペースが原文とは異なる場合があります。

3 英語で読むためのお助け ミニ 英和 表現集

ひとつの作品について4ページずつ、英文を読む際に役立つ語句を抜粋して紹介しています。紙面の都合もあり、日本語のキーワードになりそうなものを優先して選んでいます。このキーワードをもとにご自分でどんどん語彙を増やしていくとよいでしょう。

本文中の英語の語句からの抜粋です。ただし、冒頭に置かれて大文字になっているものは、小文字にしています。

日本語の原作そのままの場合には「」を用いています。

この日本語を 英語で表現する	ミニ 英和 表現集
14	transformed into a beast of gold (金獣に変わった) long, single hair protruding from the middle of their forehead (額中央から長い一本の髪が伸びる) mischief with address (悪戯な挨拶) endurance capabilities (持久力) abused facilities (悪用された施設) take a comprehensive view (総合的に見る) publican configurations (パブの配置) once you've gotten the book (一度本を手に入れたら) by means of (手段で) was cooked of a polished material (光沢のある素材で出来ていた) was composed of (構成されていた) was usually (通常は) make them buffer to a high level (高レベルまで緩衝させる) funding was easy (資金調達が簡単だった) Spreading (広げる) devised (考案した) on the stability side (安定性の面で) organize (組織化する) solid something metal (堅い金属製の何か) restrained (抑制した) a layer of long grass for green (緑の長草の層)
15	the backdoor (裏口) available outside entrance of this building (この建物の外部に利用できる入り口) advised her about (彼女にアドバイスした) psychology (心理学) take a comprehensive view (総合的に見る) publican configurations (パブの配置) once you've gotten the book (一度本を手に入れたら) by means of (手段で) was cooked of a polished material (光沢のある素材で出来ていた) was composed of (構成されていた) was usually (通常は) make them buffer to a high level (高レベルまで緩衝させる) funding was easy (資金調達が簡単だった) Spreading (広げる) devised (考案した) on the stability side (安定性の面で) organize (組織化する) solid something metal (堅い金属製の何か) restrained (抑制した) a layer of long grass for green (緑の長草の層)
16	U.S. Navy (米海軍) Cabrera (カブレラ) mechanical parts (機械部品) dive and the machine started to hum (潜り始め、機械が唸り出す) System (システム) leader (リーダー) Wahner's Quarter (ワナーの四角) between the lines (線の間) something put me on edge (何かが私を緊張させた) occupational habits (職業習慣) library use only (図書専用) routine safety check (ルーティン安全チェック) I have no other choice (他に選択肢はない) The Colonel (大佐) the two-sided character (二面性) unsubstantiated officers (根拠のない幹部) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む)
17	had no choice (他に選択肢はない) What do you make of it (どう思いますか) Dreadnought (ドレッドノート) is a loaded rifle (装弾数が多い銃) Wahner's Quarter (ワナーの四角) between the lines (線の間) something put me on edge (何かが私を緊張させた) occupational habits (職業習慣) library use only (図書専用) routine safety check (ルーティン安全チェック) I have no other choice (他に選択肢はない) The Colonel (大佐) the two-sided character (二面性) unsubstantiated officers (根拠のない幹部) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む)
18	the right hand holding the handle and the handle in tandem with the left hand adding up the ribs and teeth (右の手がハンドルを握り、左の手が肋骨と歯を合わせるように動く) The right tank and the left tank each keep separate tabs, which are then brought together the two halves of a right combination (右のタンクと左のタンクはそれぞれ別々の記録を保持し、その後右の組み合わせの半分を合わせる) For balance, suggesting that the planet earth were flat a sphere but a slightly coffee table, how much difference in everyday life would that make? (バランスを取るために、地球が丸い球体ではなく少し平たいコーヒーテーブルの形をしているとしたら、日常生活でどれだけの違いがあるだろうか?) A young woman, turned out to a girl suit, wearing pink high heels (若い女性が、女の子らしい服装で、ピンクのハイヒールを履いていた) a perhaps not impressive portion of contents, as if two wholly unrelated contents had threaded together in an unlikely manner (おそらく印象的な内容の一部で、まるで全く関係のない二つの内容が偶然に絡み合っているように見えた) With the approach of autumn, a layer of long golden grass over the bushes (秋の訪れとともに、低木の上には長い金色の草の層が広がった) All thousands of us, all at one anxious the same instant, flung that heads in the direction of the sea (我々何千人も、同時に同じ瞬間に、頭を海の方に向けて振り出した) These adults breaths crush in a rush, each in each, their long golden hair radiated in the sunset, shimmering. The status and place, they said with their heads and the last rays of the day into the open sea (大人たちの息遣いが押し寄せ、それぞれそれぞれ、長い金色の髪が夕日に照らされてキラキラと輝き、その状況と場所、彼らは頭を海と最後の日の光に向かって開き放ちた) I should sign that those things were standard to the lot I got enrolled, so I said "Thank you" (私はそのものが標準的なものであることを認めるので、そういって「ありがとうございます」と言いました) Yet each time I turn down these streets, I can sense strangers looking me up and down, looking their breath as they continue parallel I'll never know (しかし、毎回これらの通りを歩くと、私は知らない人たちが私を見上げて、呼吸を吐き出すのを感じ、彼らは平行して歩いていることに気づきません) Flick him on you are the Dreadnought. You no longer have a name. (ドレッドノートのフリックはあなたに。もう名前がありません) He spreads wide my right eye with the fingers and pushes the teeth into my eyelid (彼は指で私の右目を広げ、歯を私の眼皮に押しこめた)
19	I can feel some deep layer of my consciousness fling toward the surface (意識の深い層が表面に向かって投げつけられている) I checked back into rain gear pooled on my goggles, took flashlight in hand, and headed back into the subterranean passage (私はヘルメットに溜まった雨水を確認し、ヘッドライトを手にとり、地下の通路へと戻った) The child is just there, it like the bird. You simply feed its movements (子供はそこにいる、鳥のようだ。あなたはただその動きを待たなければならない) I was not my idea, I had no choice (それは私のアイデアでも、私は他に選択肢はない) Nobody has a shadow in this town, and nobody we let in cover leaves (この町には影がなく、私たちが誰かを招き入れることもない) A small intestine like so much between the line I get into bed and the line I fall asleep (腸のように、ベッドに入る線と寝る線の間) Something put me on edge (何かが私を緊張させた) I had a uniform stab on my hands (私の手には制服の刺繍があった) This town is perfect. And by perfect, I mean complete. It has everything. If you cannot see that, then it's too perfect. A perfect nothing (この町は完璧だ。完璧とは完璧を意味する。それは完璧だ。完璧な何もない。もしそれが見えないなら、それは完璧すぎる。完璧な何もない) Why did I read off my past to come here to the kind of the world? What is the need of reading or judging could there have been what you can't understand? (なぜ私は自分の過去をここで読むためにこの世界にきたのか？何が必要なのか？読むか判断する必要があるのか？理解できないものは何があったのか?) Why stuffing passport was hard to do (なぜパスポートの詰め込みが難しいのか) This was the last of a previously personal diary by which previously numbered numbers would be considered for completely unknown (これは以前に個人日記として使われていたもので、以前に番号が振られていたものが完全に未知のものとして扱われることになる) This was my only occasion when completely undisturbed. First there was the great check of my conviction, then I made this, a perfect plan of undisturbed sleep as the center (これは私が完全に邪魔されなかった唯一の機会でした。最初は私の信念の大きなチェックがあり、次に私はこの完璧な計画を立てました。それは中心として無邪魔な睡眠を約束するものでした) Your kind of the world consists of combinations will together to function, unaffected, until you take your first breath (あなたの世界は、機能するために組み合わせられ、無邪魔に、あなたが最初の呼吸をするまで)

原作の表現を使っていないものは < > でくくっています。

* 以下は補足説明です。

4 この日本語、英語ではこう言う ミニ 和英 表現集

原作の文章の中でこの日本語は、英語でどう表現されるのだろうかと思われるもの、作品で重要だと思われる日本語などを集めて、英語の表現を対照させた表現集です。主に1文から2、3文単位での引用になります。英文解釈、和英作文ではないので、厳密に一字一句対応はしていませんが、このシーンで表現したい真意が反映されたものとして捉えてください。

タイトルの章を示しています。数字のみで示される場合もあります。

原作日本語の文の抜粋です。ルビ、傍点などはスペースの関係で省略しています。

左の原作の文(部分)の英訳。英作文と違い、厳密な意味で一字一句対応とはなっていないので注意。

この日本語を 英語で表現する	ミニ 和英 表現集
14	transformed into a beast of gold (金獣に変わった) long, single hair protruding from the middle of their forehead (額中央から長い一本の髪が伸びる) mischief with address (悪戯な挨拶) endurance capabilities (持久力) abused facilities (悪用された施設) take a comprehensive view (総合的に見る) publican configurations (パブの配置) once you've gotten the book (一度本を手に入れたら) by means of (手段で) was cooked of a polished material (光沢のある素材で出来ていた) was composed of (構成されていた) was usually (通常は) make them buffer to a high level (高レベルまで緩衝させる) funding was easy (資金調達が簡単だった) Spreading (広げる) devised (考案した) on the stability side (安定性の面で) organize (組織化する) solid something metal (堅い金属製の何か) restrained (抑制した) a layer of long grass for green (緑の長草の層)
15	the backdoor (裏口) available outside entrance of this building (この建物の外部に利用できる入り口) advised her about (彼女にアドバイスした) psychology (心理学) take a comprehensive view (総合的に見る) publican configurations (パブの配置) once you've gotten the book (一度本を手に入れたら) by means of (手段で) was cooked of a polished material (光沢のある素材で出来ていた) was composed of (構成されていた) was usually (通常は) make them buffer to a high level (高レベルまで緩衝させる) funding was easy (資金調達が簡単だった) Spreading (広げる) devised (考案した) on the stability side (安定性の面で) organize (組織化する) solid something metal (堅い金属製の何か) restrained (抑制した) a layer of long grass for green (緑の長草の層)
16	U.S. Navy (米海軍) Cabrera (カブレラ) mechanical parts (機械部品) dive and the machine started to hum (潜り始め、機械が唸り出す) System (システム) leader (リーダー) Wahner's Quarter (ワナーの四角) between the lines (線の間) something put me on edge (何かが私を緊張させた) occupational habits (職業習慣) library use only (図書専用) routine safety check (ルーティン安全チェック) I have no other choice (他に選択肢はない) The Colonel (大佐) the two-sided character (二面性) unsubstantiated officers (根拠のない幹部) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む)
17	had no choice (他に選択肢はない) What do you make of it (どう思いますか) Dreadnought (ドレッドノート) is a loaded rifle (装弾数が多い銃) Wahner's Quarter (ワナーの四角) between the lines (線の間) something put me on edge (何かが私を緊張させた) occupational habits (職業習慣) library use only (図書専用) routine safety check (ルーティン安全チェック) I have no other choice (他に選択肢はない) The Colonel (大佐) the two-sided character (二面性) unsubstantiated officers (根拠のない幹部) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む) Chickadee (チカディ) edible (食べられる) whisking (かき混ぜる) make your eyes roll (目を丸くさせる) read manual (マニュアルを読む)
18	the right hand holding the handle and the handle in tandem with the left hand adding up the ribs and teeth (右の手がハンドルを握り、左の手が肋骨と歯を合わせるように動く) The right tank and the left tank each keep separate tabs, which are then brought together the two halves of a right combination (右のタンクと左のタンクはそれぞれ別々の記録を保持し、その後右の組み合わせの半分を合わせる) For balance, suggesting that the planet earth were flat a sphere but a slightly coffee table, how much difference in everyday life would that make? (バランスを取るために、地球が丸い球体ではなく少し平たいコーヒーテーブルの形をしているとしたら、日常生活でどれだけの違いがあるだろうか?) A young woman, turned out to a girl suit, wearing pink high heels (若い女性が、女の子らしい服装で、ピンクのハイヒールを履いていた) a perhaps not impressive portion of contents, as if two wholly unrelated contents had threaded together in an unlikely manner (おそらく印象的な内容の一部で、まるで全く関係のない二つの内容が偶然に絡み合っているように見えた) With the approach of autumn, a layer of long golden grass over the bushes (秋の訪れとともに、低木の上には長い金色の草の層が広がった) All thousands of us, all at one anxious the same instant, flung that heads in the direction of the sea (我々何千人も、同時に同じ瞬間に、頭を海の方に向けて振り出した) These adults breaths crush in a rush, each in each, their long golden hair radiated in the sunset, shimmering. The status and place, they said with their heads and the last rays of the day into the open sea (大人たちの息遣いが押し寄せ、それぞれそれぞれ、長い金色の髪が夕日に照らされてキラキラと輝き、その状況と場所、彼らは頭を海と最後の日の光に向かって開き放ちた) I should sign that those things were standard to the lot I got enrolled, so I said "Thank you" (私はそのものが標準的なものであることを認めるので、そういって「ありがとうございます」と言いました) Yet each time I turn down these streets, I can sense strangers looking me up and down, looking their breath as they continue parallel I'll never know (しかし、毎回これらの通りを歩くと、私は知らない人たちが私を見上げて、呼吸を吐き出すのを感じ、彼らは平行して歩いていることに気づきません) Flick him on you are the Dreadnought. You no longer have a name. (ドレッドノートのフリックはあなたに。もう名前がありません) He spreads wide my right eye with the fingers and pushes the teeth into my eyelid (彼は指で私の右目を広げ、歯を私の眼皮に押しこめた)
19	I can feel some deep layer of my consciousness fling toward the surface (意識の深い層が表面に向かって投げつけられている) I checked back into rain gear pooled on my goggles, took flashlight in hand, and headed back into the subterranean passage (私はヘルメットに溜まった雨水を確認し、ヘッドライトを手にとり、地下の通路へと戻った) The child is just there, it like the bird. You simply feed its movements (子供はそこにいる、鳥のようだ。あなたはただその動きを待たなければならない) I was not my idea, I had no choice (それは私のアイデアでも、私は他に選択肢はない) Nobody has a shadow in this town, and nobody we let in cover leaves (この町には影がなく、私たちが誰かを招き入れることもない) A small intestine like so much between the line I get into bed and the line I fall asleep (腸のように、ベッドに入る線と寝る線の間) Something put me on edge (何かが私を緊張させた) I had a uniform stab on my hands (私の手には制服の刺繍があった) This town is perfect. And by perfect, I mean complete. It has everything. If you cannot see that, then it's too perfect. A perfect nothing (この町は完璧だ。完璧とは完璧を意味する。それは完璧だ。完璧な何もない。もしそれが見えないなら、それは完璧すぎる。完璧な何もない) Why did I read off my past to come here to the kind of the world? What is the need of reading or judging could there have been what you can't understand? (なぜ私は自分の過去をここで読むためにこの世界にきたのか？何が必要なのか？読むか判断する必要があるのか？理解できないものは何があったのか?) Why stuffing passport was hard to do (なぜパスポートの詰め込みが難しいのか) This was the last of a previously personal diary by which previously numbered numbers would be considered for completely unknown (これは以前に個人日記として使われていたもので、以前に番号が振られていたものが完全に未知のものとして扱われることになる) This was my only occasion when completely undisturbed. First there was the great check of my conviction, then I made this, a perfect plan of undisturbed sleep as the center (これは私が完全に邪魔されなかった唯一の機会でした。最初は私の信念の大きなチェックがあり、次に私はこの完璧な計画を立てました。それは中心として無邪魔な睡眠を約束するものでした) Your kind of the world consists of combinations will together to function, unaffected, until you take your first breath (あなたの世界は、機能するために組み合わせられ、無邪魔に、あなたが最初の呼吸をするまで)

会話文の「」は省略。ただし、会話と会話の間に地の文が入る場合には、「」を生かしています。できるだけ文として表現するために、原文を変えずに句点「。」を入れています。

会話文の“ ”は省略。ただし、会話と会話の間に地の文が入る場合には、“ ”を生かしています。できるだけ、文として表現するために、原文の英語そのものは変えずに、文頭は大文字、文末はピリオドをつけています。

「ムラカミ」のアメリカ進出と 読まれ方

八巻由利子

(フリーランスライター：ニューヨーク在住)

日本文学びいきに恵まれて

ニューヨークの書店の fiction コーナーには、村上春樹の著作が少なくとも 10 冊は並んでいる。日本で処女作『風の歌を聴け』が出たのは 1979 年。その 10 年後に、アメリカで初めて『羊をめぐる冒険』の英訳 (*A Wild Sheep Chase*) を出版。それから約 30 年の軌跡が書棚に表れている。

三島由紀夫を愛読し、レイモンド・カーヴァーも担当していたことから村上と出会い、1993 年に短編集 *The Elephant Vanishes* (後に逆輸入出版された『象の消滅』) を担当して以来、『海辺のカフカ』(*Kafka on the Shore*) まで手がけたクノッフの編集者ゲイリー・フィスケットジョンは、10 年前に彼と会ったとき、「新作が出ると過去の作品も売れる稀有の存在。これからもずっと読まれ続けるだろう」と予測していたが、その言葉どおりだ。

文学でもアートでもパフォーマンスでも、*The New York Times* の文化欄で紹介されると読者や鑑賞者が増加すると言われている。1989 年に講談社インターナショナル・アメリカ社が

らアルフレッド・バーンバウム訳で出た『羊をめぐる冒険』が同紙で称賛されたのは、幸先のいい出来事だった。この本が出る少し前、夏目漱石や芥川龍之介などの近代文学を研究していて、現代文学は眼中になかったジェイ・ルーピンは、アメリカの出版社から『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(*Hard-Boiled Wonderland and the End of the World*) を読んで、翻訳するに値するか知らせてほしいと依頼された。『羊をめぐる冒険』の英訳が出る前から下馬評が高かったからだろう。ルーピンはすっかり村上の世界に引き込まれ、その個人主義を「現代の漱石」と評価した。結果的に、この長編はバーンバウムによって訳出されたが、ルーピンがふたり目の翻訳者として村上と出会うのは必至だった。

『羊をめぐる冒険』が評判になった翌年、さまざまなコネクションによって、1925 年創刊の週刊誌 *The New Yorker* に *TV People* 『TV ビーブル』を掲載できた。処女作の題名はトルーマン・カポーティの文章からヒントを得て付け、作家デビュー直後に F・スコット・フィッツジェラルドの翻訳を雑誌に発表した村上である。自ら愛好する作家たちが寄稿したこの雑誌が米

ニューヨーク市マンハッタンにあるBarns & Noble書店のHaruki Murakamiのコーナー。(八巻由利子：2020年8月撮影)

THE WIND-UP
BIRD
CHRONICLE

HARUKI
MURAKAMI



村上春樹の小説を英語で読む楽しさ

谷川敬子
(編集者)

村上春樹の小説で好きなところ——それは主人公の息遣いがそのまま伝わってくるところだ。普段のさりげないやりとりや、気持ちの揺れ動きを重ねた情景描写に、その場の空気感が丸ごと手に取るように伝わってくる。共感と親近感と、そして新鮮な驚きに出会える文章だ。

初めて読んだ彼の作品は *Dance Dance Dance* (『ダンス・ダンス・ダンス』) だった。当時カナダ在住だった私は、日本で話題の小説家の本を読んでみたかったまらなくて、吉本ばななをはじめ英訳版が出ている作品を次々と読んでいた。書籍の入手が今ほどオンラインなどでたやすくなかった頃のことである。大学近くの書店で見つけた *Dance Dance Dance* は新鮮だった。テンポよい文でスナップショットのように場面が切り替わり、主人公のちょっとした心情の揺れが細やかに、色鮮やかに表現されていた。帰国後、日本語で同じ作品を読み直してみると、英語で読んだ世界が、日本語版でも違和感なく表現されていた。よくある日本語版と英語版とのギャップがあまり感じられない稀有なケースだった。まず英語版で読み、日本語のオリジナルで「答え合わせ」をする、そしてその再現性と英訳の妙にため息をつく、という読み方が以来、私の定番となった。

これまでに出版されている村上春樹の作品はほとんど日本語と英語で読んできたが、中でも特に楽しめたものは、長編小説では *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage* (『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』)、短編集では *Blind Willow, Sleeping Woman* (『めくらやなぎと眠る女』) だ。『多崎つくると』では、自分の学生時代と重ね合わせて、そのときの情景や心情を半ば思い出しながら読んでいたため、ひとつひとつの表現が心に刺さった。英語で読むときは時に声に出して読むこともあり、音の語感を楽しみながら韻律がよいフレーズに当たるとつい繰り返してしまう。また、話の中に出てくる普段の何気ない動作、例えば、「テーブルに肘をついて」(elbows planted on the table) や、「ぼんやりと見つめて」(gazed absently at) といった表現は、英語ではこんなふうに言うんだ！ と見つけたうれしさで、ついメモしたくなる。日本語で読むときはまた違った楽しみ方が、英語にはある。

英語で読むなら、私のおすすめは、音を楽しんでみることだ。元の日本語の小説が、比較的テンポよい会話のやりとりや、歯切れよい短めの文章で構成されているため、英語でもそうした文調が再現されていることが多い。これを朗読すると、実に気持ちがいいのだ。さらに普段の何気ないしぐさや言葉のやりとりが、堅苦しさを取り払ったこなれた英語で描かれている。日本語と英語で読み比べて、特に英訳しにくそうな表現にスポットを当ててさまざまな英文を見ていくと、翻訳者の卓越したスキルに感動することだろう。また、気に入った表現があったらメモしておけば、今度は自分が表現するときに、今までよりこなれた表現が楽しめるようになる。私にとって村上春樹の英語版は、作品として楽しむだけでなく、上質の英語のお手本としても大切な存在であり続けている。



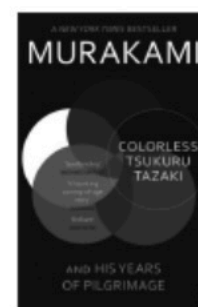
Dance Dance Dance
Vintage



『ダンス・ダンス・ダンス』上・下
講談社文庫



村上春樹



Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage
Vintage



Blind Willow, Sleeping Woman
Vintage

紹介する10作品の長編小説

※「ダンス・ダンス・ダンス」のみ
簡単な紹介

1 『風の歌を聴け』 単行本出版年 1979年 出版社 講談社	<i>Hear the Wind Sing</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1987年) Ted Goossen (2015年)
2 『1973年のピンボール』 単行本出版年 1980年 出版社 講談社	<i>Pinball, 1973</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1985年) Ted Goossen (2015年)
3 『羊をめぐる冒険』 単行本出版年 1982年 出版社 講談社	<i>A Wild Sheep Chase</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1989年)
4 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 単行本出版年 1985年 出版社 新潮社	<i>Hard-Boiled Wonderland and the End of the World</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1991年)
5 『ノルウェイの森』 単行本出版年 1987年 出版社 講談社	<i>Norwegian Wood</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1989年) Jay Rubin (2000年)
※ 「ダンス・ダンス・ダンス」(一部) 単行本出版年 1988年 出版社 講談社	<i>Dance Dance Dance</i> 英訳者 Alfred Birnbaum (1994年)
6 『ねじまき鳥クロニクル』 単行本出版年 1994年(第一、二部) 1995年(第三部) 出版社 新潮社	<i>The Wind-Up Bird Chronicle</i> 英訳者 Jay Rubin (1997年)
7 『海辺のカフカ』 単行本出版年 2002年 出版社 新潮社	<i>Kafka on the Shore</i> 英訳者 Philip Gabriel (2005年)
8 『1Q84』 単行本出版年 2009年(Book1, 2) 2010年(Book3) 出版社 新潮社	<i>1Q84</i> 英訳者 Jay Rubin (Book 1, 2) and Philip Gabriel (Book 3) (2011年)
9 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 単行本出版年 2013年 出版社 文藝春秋	<i>Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage</i> 英訳者 Philip Gabriel (2014年)
10 『騎士団長殺し』 単行本出版年 2017年 出版社 新潮社	<i>Killing Commendatore</i> 英訳者 Philip Gabriel and Ted Goossen (2018年)

風の歌を聴け

Hear the Wind Sing

作品情報

30歳のときに書いた最初の小説。この作品は、続く『1973年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』とあわせて「僕」と「鼠」と呼ばれる友人を軸として描かれる3部作になっている。

この物語はもうすぐ30歳になる「僕」の青春時代の回想として描かれたもの。大学生の「僕」が夏休みに故郷に帰省した1970年8月8日に始まり、大学に戻るために故郷を離れる26日に終わる18日間のストーリーだ。「僕」と「鼠」は中国人のJが経営する「ジェイズ・バー」を根拠にして連日ビールを飲んですごしていた。ある日、「僕」は泥酔した小指のない4本指の女性をバーの洗面所で助けて彼女の家まで連れていく。彼女の関係とともにさまざまな過去のできごとを思い出す。本作品は『群像』に掲載され、群像新人賞を受賞した。

初出 1979年『群像』
単行本 1979年（講談社）
文庫 1982年（講談社文庫）

【英訳版】*Hear the Wind Sing*
英訳者 Alfred Birnbaum (1987年、講談社英語文庫)
Ted Goossen (2015年、Harvill Secker)

登場人物

僕 / I

29歳の「僕」が大学生の頃を振り返ってこの文章を書いている。東京の大学で生物学を専攻していた「僕」は海辺の街に帰省して、「鼠」とつるんでビールを飲み、羽目を外した生活をしてきた。

鼠 / the Rat

「僕」の友人。恐ろしく本を読まない。「僕」が大学に入った年、朝の4時過ぎに黒塗りのフィアット600に乗り合わせ、「僕」とチームを組むことになる。金持ちを嫌うが父親は化学薬品の売買で財を成した。

ジェイ / J

ジェイズ・バーのマスター。中国人。「僕」よりずっと上手い日本語を話す。一人称は「私」。煙草を吸う。中国には一度も行ったことはないが、港に行くと船を見る度帰ってみたいと思う。

小指のない女の子 / the girl without a little finger

ジェイズ・バーの洗面所に倒れていたところを「僕」が介抱した女の子。8歳のとき電気掃除機のモーターに小指を挟み指を失った。レコード店で働いているところを「僕」と再会し、ビーチ・ボーイズのLPを売った。

デレク・ハートフィールド / Derek Hartfield

筆者が創作した架空の作家。「僕」が多大な影響を受けた作家として描かれる。1909年オハイオ生まれ。1938年、エンパイア・ステート・ビルから飛び降り自殺。「僕」曰く、「もしデレク・ハートフィールドという作家に出会わなければ小説なんて書かなかった」。

取り上げた4つのシーンについて

シーン1 完璧な文章などといったものは存在しない

村上春樹が作家としてのスタートを切る処女作の冒頭。“There’s no such thing as a perfect piece of writing. Just as there’s no such thing as perfect despair.”といきなり比喩で始まる。書くことと文章に対するこだわりを感じさせる出だした。29歳になる主人公「僕」が、1970年8月8日から26日までの故郷に帰省中の21歳の時の出来事を回想する。

シーン2 僕が鼠と初めて出会ったのは3年前の春のことだった

4章の冒頭。『風の歌を聴け』から『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』まで登場する「僕」の友人である鼠 the Rat との初めて出合いのシーン。泥酔して車を運転して事故を起こすという若いふたりの無謀な青春。このシーンには、勢いのよい flat-out wasted (泥酔して)、bulldozed (踏み倒した)、wrapped ourselves around (正面から突っ込んでぶつめた)、overdid the booze (少し飲み過ぎたな) のような破壊的な言葉やスラングが並ぶ。

シーン3 僕が寝た三番目の女の子について話す

26章、三番目に寝た女の子についての「僕」のモノローグ。She looks a bit awkward, and lovely. It is a loveliness that touches the heart. (彼女は幾らか不器用そうに見え、そして美しかった。それは見た人の心の中の最もデリケートな部分にまで突き通ってしまいそうな美しさだった) のようなシンプルで詩的な描写を味わいたい。

シーン4 それは火星の地表に無数に掘られた

「僕」が好きな架空の作家ハートフィールドの作品のひとつ、「火星の井戸」のあらすじ。本作品以降の村上作品にもたびたび登場する作品の重要なモチーフ「井戸」と「時空の移動」に関する話が、One and a half billion years passed while you were down the well. (君が井戸を抜ける間に約15億年という歳月が流れた) のように、象徴的に両方とも登場する。

シーン1~4

pp.26-41
出典



Hear the Wind Sing / Pinball, 1973

Vintage International
訳: Ted Goossen



『風の歌を聴け』
講談社文庫

“There’s no such thing as a perfect piece of writing. Just as there’s no such thing as perfect despair.” So said a writer I bumped into back when I was a university student. It wasn’t until much later that I could grasp his full meaning, but I still found consolation in his words—that there’s no such thing as perfect writing.

All the same, I despaired whenever I sat down to write. The scope of what I could handle was just too limited. I could write something about an elephant, let’s say, but when it came to the elephant’s trainer, I might draw a blank. That kind of thing.

I was caught in this bind for eight years—eight years. A long time.

If one operates on the principle that everything can be a learning experience, then of course aging needn’t be so painful. That’s what they tell us, anyway.

From the age of twenty on, I did my best to live according to that philosophy. As a result, I was cheated and misunderstood, used and abused, time and again. Yet it also brought me many strange experiences. All sorts of people told me their stories. Then they left, never to return, as if I were no more than a bridge they were clattering across. I, however, kept my lips zipped tight. And so the stories stayed with me until I entered this, the final year of my twenties.

「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。」

僕が大学生のころ偶然に知り合ったある作家は僕に向かってそう言った。僕がその本当の意味を理解できたのはずっと後のことだったが、少なくともそれをある種の慰めとしてとることも可能であった。完璧な文章なんて存在しない、と。

しかし、それでもやはり何かを書くという段になると、いつも絶望的な気分に乗られることになった。僕に書くことのできる領域はあまりにも限られたものだったからだ。例えば象について何かを書けたとしても、象使いについては何も書けないかもしれない。そういうことだ。

8年間、僕はそうしたジレンマを抱き続けた。——8年間。長い歳月だ。

もちろん、あらゆるものから何かを学び取ろうとする姿勢を持ち続ける限り、年老いることはそれほどの苦痛ではない。これは一般論だ。

20歳を少し過ぎたばかりの頃からずっと、僕はそういった生き方を取ろうと努めてきた。おかげで他人から何度となく手痛い打撃を受け、欺かれ、誤解され、また同時に多くの不思議な体験もした。様々な人間がやってきて僕に語りかけ、まるで橋をわたるように音を立てて僕の上を通り過ぎ、そして二度と戻ってはこなかった。僕はその間じっと口を閉ざし、何も語らなかった。そんな風にして僕は20代最後の年を迎えた。

1 **bumped into** 「偶然に知り合った」
All(all) the same 「しかし、それでもやはり」
The scope of what I could handle 「僕に書くことのできる領域は」。* scope は「範囲、視野」。
let's say 「例えば」
when it came to (the elephant trainer) 「(象使い) については」。* When it comes to... は「話が～ということになると」。
was caught in this bind 「そうしたジレンマを抱き続けた」。* bind は口語で「苦境、困った立場」という意味で使われる。ジレンマは dilemma とも言える。
That's what they tell us, anyway. 「これは一般論だ」
return to the veldt 「平原に還り」。* veldt は「(アフリカの南部にあるような低木などがある) 草原」。
sterile 「不毛な」
his prose is mangled 「文章は読み辛く」。* mangle には「文章をわからなくする」という意味がある。
juvenile 「稚拙な」
slapdash 「出題目で」。* slapdash は「いいかげんな、急ごしらえの」。
sheer combativeness 「戦闘的な姿勢」。* sheer は「純粋の、まったくの」、combativeness は「闘争心」。
waged his fruitless battle 「不毛な闘いを続け」。* wage は名詞で「賃金」の意味がよく使われるが、ここでは「(戦争などの闘いを) 行う、遂行する」。
terrible case of crotch rot 「股の間にひどい皮膚病」。* crotch rot は俗語で「いんきんたむし」。
intestinal cancer 「腸の癌」
hacked... up <スタスタに切り裂かれ>。
 * hack は「切り刻む、スタスタに切る」。
died in agony 「苦しみ抜いて死んだ」
bristled with... <～でいっぱい>
ferrying fluids <液体を運ぶ>
crafty 「狡猾な」
land mine 「地雷」
verifying the distance 「距離を確認すること」。* verify は「確かめる」。
sensitivity 「感性」
jettisoning 「放り出し」
incinerate my corpse incinerate one's corpse は「遺体を焼く」。

a shard of bone 「骨ひとつ」。* a shard of... は「～の一片」。
only to find the whole thing has missed the mark 「(結果として) それが見当違いといったこともある」。* miss the mark は「的をはずす、失敗する」。
ascribing meaning to life 「それに意味をつけるのは」。* ascribe...to～は「……を～に帰する」。
overturning whole systems of values 「あらゆる価値は転換し」
trampled underfoot 「踏みじった」。
 * trample は「踏みつける」、underfoot は「足元に」。tumble...underfoot で「蹂躪する」。
That's what art is. 「芸術とはそういったものだ」
raids 「漁る」

3 **bellowing** 「どなっている」
Leeches! 「ダニ」
bastards 「くそったれ」
puke <吐く、もどす>
contemplating 「眺めた」。
 * contemplate は「じっと見る」。
(Far) far out <(俗) すげえ!、カッコイイ!>
swig <がぶ飲み>
Make me want to puke 「虫酸が走る」
bumped me out 「嫌な気分になった」。
 * bum out は「落ち込ませる」。
To be blunt 「はっきり言って」。* blunt には「鈍い」のほかに「不遠慮な」という意味もある。(Sorry) to be blunt で「(相手にとってぶしつけかもしれないが)」「率直に言わせてもらえば」というニュアンス。
signature phrases 「口癖」。* signature phrase は「決め台詞」。
No argument there. 「そのとおりだった」

4 **flat-out wasted** 「泥酔して」。* flat-out は「すっかり、ぐでぐでんに」、wasted は俗語で「酔っ払った」。
bulldozed 「踏み倒す」
wrapped ourselves around <ぶつかった>
frigging miracle 「僥倖」。* frigging は俗語で「いまいましい」。
the busted car door 「壊れた車のドア」
overdid the booze 「少し飲み過ぎたな」。
 * overdo は「やり過ぎる」、booze は「酒」。
give me a boost 「引っぱり上げてくれ」
chucked 「放り投げてしまう」

propped our backs against the embankment 「堤防にもたれ」

5 **The Rat is a virtual stranger to books.** 「鼠はおそろしく本を読まない」
flyswatter 「蠅叩き」
what about people who are alive and breathing? 「生身の人間はどう?」
if you backed me into a corner 「切羽詰まった状況に追い込まれたら」。* back は動詞で「後退させる」。
fiddled with the rim <縁をいじりまわしながら>

6 **squirms and fishes about in his pockets** 「モジモジしながらあてもなくポケットを探った」。* squirm は「もがく、身もたえする」、fish には動詞で「探す」の意味がある。about は動詞と一緒に「あちこち～する」「～しまわる」という意味を作る副詞。

7 **was perched on a bluff** 「高台にあり」。
 * 建物などが断崖の上にある様子を表す。perch は「高い場所に置く」、bluff は「絶壁、急勾配の岬」で「はったり」の意味もある。
made him huff and puff 「ふうふう言いながら」。* huff and puff は「息を弾ませる、激しい息づかいをする」。
big fat zero 「ゼロだ」。* big fat zero は悪いことを強調する言い方。ちなみに Big Fat Zero というタイトルの Graham Parker の歌がある。
a torrent of words came gushing from my mouse 「喉を切ったように僕は突然しゃべり始めた」。* torrent は「奔流、ほとばしり」、gush は「噴出する、どっと流れ出る」。
fill in the void 「ブランクを満たす」。
 * be void of... は「～がない、欠けている」。
the fever subsided 「熱が引いた」。
 * subside は「低下する、静まる」。

8 **freighters** 「貨物船」
offshore <沖合に>
All signs pointed to another scorcher of a day. 「暑い一日になりそうだった」。
 * scorcher は「焼け付くように暑い日」。
radio calisthenics 「ラジオ体操」。
 * calisthenics は「徒手体操」。
a year or two shy of twenty 「20歳より幾つか若く」。* shy には「～に足りない、不足して」の意味がある。
pubic hair 「陰毛」。* pubic は「陰部の」。

9 **balmy** 「気持ちの良い」
Freaked me out. 「変な気がしたよ」
totally sloshed 「グダングダに酔払って」
hoisted you off the washroom floor 「君を抱き起こして洗面所から連れ出し」。* hoist は「かつぎ上げる、つり上げる、持ち上げる」。
lugged you back to the bar <バーへ引きずっていった>。* lug は「引きずる」。
figuring <～だと思っ>
whacked 「打った」。* whack は「強く打つ」。
alcohol poisoning 「アルコール中毒」。* 「急性アルコール中毒」は acute alcoholism などと言える。
chugged 「がぶ飲みした」
spat out 「吐き捨てるように(そう)言う」
guy who'll take advantage of a girl who's passed out 「意識を失くした女の子と寝よう奴」。* take advantage of...には「活用する、利用する」の他に、「～の弱みに付け込む」の意味がある。pass out は「意識を失う」。
you can't get any lower than that 「最低よ」
Fat chance! 「信じられないわ」。* 「見込みがない、あるわけがない」という意味の口語表現。
lewd smile 「ひどく下卑た笑い」。* lewd は「みだらな、猥褻な」。
Beats me. 「さあね」。* Beat me. は「わからない」という意味の口語表現。
stifling hot 「ひどく暑く」。* stifling は「息苦しい、暑苦しい」。

10 **scorcher** 「ひどく暑い」。* scorcher は「焼け付くように暑い、じりじりと暑い」。
That was it. 「それだけだった」
in a gaudy dress 「派手なワンピースを着た」。
 * gaudy は「けばけばしい、派手な」。
whisked the coins 「すばやく小銭をかきあつめる」。* whisk は「素早く動かす、はたく」。
Don't sweat it. 「気にしなくていいですよ」。
 * Don't sweat it. は「気にするな、心配するな」という意味の口語表現。
neuralgic cow 「神経痛の牛」
Hightailing it, huh? 「逃げ出すのかい?」。
 * hightail は「急いで去る」。

11 **fuse** 「ヒューズ」

1	完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。	There's no such thing as a perfect piece of writing. Just as there's no such thing as perfect despair.
	そういうことだ。	That kind of thing.
	もちろん、あらゆるものから何かを学び取ろうとする姿勢を持ち続ける限り、年老いることはそれほどの苦痛ではない。これは一般論だ。	If one operates on the principle that everything can be a learning experience, then of course aging needn't be so painful. That's what they tell us, anyway.
	文章を書くことは自己療養の手段ではなく、自己療養へのささやかな試みにしか過ぎないからだ。	Writing is not a full step toward self-healing, just a tiny, very tentative move in that direction.
	僕が正直になろうとすればするほど、正確な言葉は闇の奥深く沈み込んでいく。	The more I try to be honest, the farther my words sink into darkness.
	象は平原に還り僕はより美しい言葉で世界を語り始めるだろう。	The elephant will return to the veldt, and I will tell the story of the world in words far more beautiful than these.
	結局のところ、不毛であるということはそういったものなのだ。	In the final reckoning, I suppose, that's what being sterile is all about.
	文章を書くという作業は、とりもなおさず自分と自分をとりまく事物との距離を確認することである。	Writing is, in effect, the act of verifying the distance between us and the things surrounding us.
	必要なものは感性ではなく、ものさしだ。	What we need is not sensitivity but a measuring stick.
	それが落とし穴だと気づいたのは、不幸なことにずっと後だった。	Sadly for me, it took ages to see that this was a trap.
3	僕たちが認識しようと努めるものと、実際に認識するものの間には深い淵が横たわっている。	A gulf separates what we attempt to perceive from what we are actually able to perceive.
	金持ちなんて・みんな・糞くらえさ。	Eat shit, you rich bastards!
	金持ち面をしてる奴らを見るとね、虫酸が走る。	The bastards can't do a damn thing for themselves. Looking at their faces makes me want to puke.
	はっきり言って、というのが鼠の口癖だった。	"To be blunt" was one of the Rat's signature phrases.

5	鼠はおそろしく本を読まない。	The Rat is a virtual stranger to books.
	死んだ人間に対しては大抵のことが許せそうな気がするんだな。	I guess because I feel like I can forgive dead people.
7	医者言ったことは正しい。文明とは伝達である。表現し、伝達すべきことが失くなった時、文明は終る。パチン……OFF。	The doctor was right. Civilization is communication. When that which should be expressed and transmitted is lost, civilization comes to an end. Click ... OFF.
8	別の体に別の魂をむりやり詰めこまれてしまったような感じがする。	I feel like I'm stuck in another body inhabited by someone else's spirit.
	下腹部には細い陰毛が洪水の後の小川の水草のように気持よきはえ揃っている。	Her delicate pubic hair reminded me of river grass after a flood.
11	……おい、参ったね、しゃっくりが出そうだよ……	... Hey, I feel a hiccup coming on.
19	話せば長いことだが、僕は21歳になる。	To keep it short and sweet: I'm twenty-one years old.
	そんな所でウロウロしているとバクられるぜ。	If you hang around here you're going to get busted.
	みすぼらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。	She hanged herself in the shabby grove of trees by the tennis courts.
20	誰だって何かを抱えてるんだよ。	Everybody's carrying stuff like that around.
	ねえ、双子の姉妹がいるってどんな感じ。	So what's it like having a twin sister?
	そうね、変な気分よ。同じ顔で、同じ知能指数で、同じサイズのブラジャーをつけて……、いつもうんざりしてたわ。	It feels kind of weird. I mean, you've got the same face, the same IQ, the same bra size ... it's a real turnoff.
	あなたって確かに少し変ってるわ。	You really are a little nuts.
22	いつも肝心なことだけ言い忘れる。	I always forget the important stuff.
23	他人に伝える何かがある限り僕は確実に存在しているはずだと。	That having something to communicate could stand as proof I really existed.
24	これは決して良い徴候ではない。	Not a good sign, for sure.
26	時々僕は自分が一時間ごとに齢を取っていくような気さえする。そして恐ろしいことに、それは真実なのだ。	There are times when I can even feel myself aging by the hour. The scary thing is, it's true.

第一章 1970/11/25		
	空気はどことなくピリピリしていて、ちょっと力を入れて蹴とばしさえすれば大抵のものはあっけなく崩れ去りそうに思えた。	The air was alive, even as everything seemed poised on the verge of collapse, waiting for a push.
	昔、あるところに、誰とでも寝る女の子がいた。	Back then, there was this girl who'd sleep with anyone.
	あなたはいったい何を抱えこんでいるの？	Just what is it you're brooding over?
	べつに心を閉じているつもりはないんだ。	You know, I never mean to shut you out.
第二章 1978/7 月		
1	「しかし」も「けれども」も「ただし」も「それでも」も何も無い。ただ単に僕は酔っ払っただけだ。	No ifs, ands, or buts. Only the statement "I am drunk," plain and simple.
	やれやれ。	Just great.
	その上に細かいちりのような沈黙が浮かんでいた。	A silence hovered about them, fine as dust.
	もう私には関係のないことだから。	I'm out of the picture already.
	でも、きっとそういう問題でもないのね。	But I guess that's not the point now, is it?
	2	キリコの絵に出てきそうな不思議な見知らぬ街に一人で残されたような気がした。
	彼女にとって、僕は既に失われた人間だった。	To her, I was already lost.
第三章 1978/9 月		
1	僕が最初に女の子と性交したあとで思い出したのも、その巨大な鯨のペニスだった。	It came back to me, that giant whale's penis, after having intercourse with a girl for the very first time.
	耳は私であり、私は耳であるのよ。	I am my ears, my ears are me.
	彼女はまるでカメレオンのように場所や状況によって、その輝きを出したりひっこめたりすることができたのだ。	Like a chameleon, she would change with place and circumstance, able, at will to summon or control that glimmer of hers.
	余計なことを考えないで済むからさ。	No unnecessary decisions.
	閉鎖された耳は死んだ耳なの。	Blocked ears are dead ears.

	意識的に通路を分断してしまうってことなんだけど……わかるかしら？	I consciously cut off the passageway... Do you follow me?
	要するに仕方ないことなんだよ。	I mean, I take what I get.
2	彼女と彼女の耳は一体となり、古い一筋の光のように時の斜面を滑り落ちていった。	She was at one with her ears, gliding down the oblique face of time like a protean beam of light.
	これが耳を開放した状態なの。	These are my ears in their unblocked state.
3	それはあなたが自分自身の半分でしか生きてないからよ。	That's because you're only half-living.
	どうせ羊の話だろう。	Heaven knows it's got to be about sheep.
第四章 羊をめぐる冒険 I		
3	このあたりはうやむやなんだ。	The facts get a little fuzzy here.
	緑の下で名もない小人が紡ぎ車をまわしてるんだよ。	Nameless elves out in the woods have been busy at the spinning wheel.
	第六感だよ。	Sixth sense.
	「やれやれ」と相棒はため息をついた。	"Give me a break," my partner sighed.
	世事に疎いんだ。	Dumb to the world, that's me.
	ずいぶん詳しいね。	Been doing your homework, I see.
4	つまり我々は背後の「全て」と眼前の「ゼロ」にはさまれた瞬間的な存在であり、そこには偶然もなければ可能性もない、ということになる。	In other words, sandwiched as we are between the "everything" that is behind us and the "zero" beyond us, ours is an ephemeral existence in which there is neither coincidence nor possibility.
	ドーナツの穴を空白として捉えるか、あるいは存在として捉えるかはあくまで形而上的な問題であって、それでドーナツの味が少しなりとも変わるわけではないのだ。	Whether you take a doughnut hole as blank space or as an entity unto itself is a purely metaphysical question and does not affect the taste of the doughnut one bit.
第五章 鼠からの手紙とその後日譚		
2	もちろんこれがとても虫の良い頼みであることはよくわかっている。	I know it's a selfish request.
3	結局のところ全ては失われてしまった。失われるべくして失われたのだ。それ以外に、全てを手放す以外に、僕にどんなやりようがあったら？	Maybe, but it was all gone now. Lost, perhaps meant to be lost. Nothing I can do about it, got to let it go.
	「時代が変わったんだよ」と僕は言った。時代が変われば、いろんなことも変わる。	"Times have changed," I said. "A lot of things have changed."
	でも結局はそれでいいんだよ。	But the bottom line is, that's fine.